国際協力特別賞

Change my action

宮崎県立宮崎西高等学校　１年　伊東　万葉

言葉にしなくても伝わる―私たちは親しくなればなるほどそう思ってしまう。例えば友達…例えば家族…。馴れ合いの中で言葉にすることが億劫になったり、「分かってもらえるはず」という甘えがどこかに生まれて、言葉にすることを後回しにしてしまう。相手に対してだけでなく、自分の中にある思いや考えを「なんとなく」で終わらせる。私の悪い癖だ。しかし、今年の夏、私は「言葉にすることの大切さ」を強く感じる経験をした。

今年の夏、私はマレーシアへの研修に参加した。マレーシアは大きく分けると、マレー、中華、インドの三つの民族に分かれている。その中でも約八割を占めるのが、マレー系で、彼らの多くはイスラム教徒である。イスラム教徒の多くは一日に五回、メッカの方向に向かって礼拝をする。交流で訪れた場所にもお祈りをするための場所が多くあった。宗教があると、そこには文化が生まれる。豊かな文化を持つ民族の人たちとの交流は、私にとって、一番の楽しみだった。聞きたいこともたくさんあった。私のバディとなったのは、民族衣装を着たマレー系のリンさん。リンさんは、とてもすてきな笑顔で私に接してくれた。私が文化について興味を持っていることを知ると、丁寧に分かりやすく説明してくれた。説明も質問の内容も英語だったが、言っていることはよく分かった。私に分かりやすい言葉を選んでくれたのだと思う。しかし、私はほとんど答えることができなかった。自分でもショックだった。伝えたいことはたくさんあった。頭の中にはあるのに、それを言葉にできないもどかしさ。言葉だけの問題ではなかった。私自身に問題があったのだ。私は普段「ふつう」や「それな」などの言葉をよく使う。メールでのやりとりでは「り」（了解）という文字で済ますこともよくある。これらの言葉は、私の「思考」や「表現」を奪っている。溢れるほどに伝えたいことがたくさんあるはずなのに伝えられない。リンさんともっと仲良くなりたいし、日本のこともっと伝えたいのに伝えられない不甲斐なさ…。これまで私が「何となく」会話をして、「何となく」コミュニケーションを取ってきた結果だった。後悔だらけだった。泣きそうになりながら、少しだけアニメの話をした。そんな私に笑顔で向き合ってくれるリンさんに対して、心から申し訳なかった。

これまでの私は、人とのコミュニケーションの中で一番大切なことは「相手を尊重すること」だと信じてきた。相手の話を聞くこと、相手を否定しないこと、そうすれば関係性は作れる―と。そもそも、尊重の意味が間違っていた。文化について知りたいと思うなら私はもっと深く文化について勉強しておくべきだったし、私自身がしっかりと日本の文化についても理解しておくべきだった。相手を尊重するためには、相手に向き合える自分でいること、自分の考えを言葉にできること、「思い」を持つことが大事なのだ。私は、今、人と向き合うことのできる自分でいたいと強く感じている。そのためには自分をしっかり持たなければいけない。語学ができること、前に出てパフォーマンスできることももちろん大切なことだ。しかし、その前に自分と向き合わなくてはいけない。自分の育った国のことや世界中のことをもっと学ばなくてはならない。自分の中身を充実させ、本当の意味で相手を尊重できる自分になりたい。

グローバル化は益々進み、世界の距離はもっともっと近くなっていくだろう。これからの時代を生きていく中で、どこの国の人であっても、だれであっても、本当の意味で相手を尊重し、向き合っていきたい。そのためにも、今回の失敗から学び、まずは自分の思いを、ことばにして伝えることから始めたいと思う。